

津島 佑子（つしま・ゆうこ）

1、プロフィール

昭和 60 年3月、長男大夢の突然の死にあう。これ以降、愛児の死に直面した衝撃と混乱を多く夢という場を借りて、強烈に反映した諸作品を書きついだ。『夢の記録』など。

<生没>

1947(昭和 22)年3月 30 日 ~ 2016(平成 28)年2月 18 日

<代表作>

『謝肉祭』『葎の母』『草の臥所』『寵児』『光の領分』『黙市』『火の河のほとりで』『夜の光に追われて』『火の山—山猿記』

<青森との関わり>

小説家太宰治の次女。作家太田治子は異母妹。

2、作家解説

東京都北多摩郡三鷹町で、父太宰治、母美知子の次女として生まれた。本名里子。白百合女子大学英文科卒業。在学中から「文芸首都」等の同人として小説を書き始め、「文芸」「三田文学」などにも短編小説を発表。昭和 46 年に第一作品集『謝肉祭』を刊行した。

「狐を孕む」が第 67 回(昭和 47 年上半期)芥川賞候補になったとき、丹羽文雄はその選評で「いかにも太宰治の娘さんらしい感覚のあふれたもの」とし、「こうした才能は大切に育てたい。発想が新しいが太宰治をはねかえすほどに大きくなるには、他の作家の経験しない苦しみがあることが想像される」と述べた。

昭和 48 年には『童子の影』、書き下ろし長編『生き物の集まる家』を刊行。旺盛な創作力で発表された作品はまた、多くの賞に輝いた。

受賞作品に『葎の母』(50 年刊・第 16 回田村俊子賞)、『草の臥所』(52 年刊・第 5 回泉鏡花文学賞)、『寵児』(53 年刊・第 17 回女流文学賞)、『光の領分』(54 年

刊・第1回野間文芸新人賞)、「黙市」(57年発表・第10回川端康成文学賞)、『夜の光に追われて』(61年刊・第38回読売文学賞)、『真昼へ』(63年刊・第17回平林たい子文学賞)、『風よ、空駆ける風よ』(平成7年刊・第6回伊藤整文学賞)、『火の山—山猿記』(10年刊・第34回谷崎潤一郎賞・第51回野間文芸賞)、『笑いオオカミ』(12年刊・第28回大佛次郎賞)、『ナラ・レポート』(16年刊・平成16年度芸術選奨文部科学大臣賞・第15回紫式部文学賞)、『黄金の夢の歌』(22年刊・第53回毎日芸術賞)等がある。

小説のほかにすぐれたエッセイの書き手でもあった。随筆集には『透明空間が見える時』『夜のティー・パーティー』『私の時間』がある。

3、資料紹介

○『夜の光に追われて』

図書

1986(昭和61)年10月24日

195mm×140mm

作品は2つの内容から成立している。一は愛児が浴槽で溺死するという不慮の事故にあった女性作家の〈私〉が、『夜の寢覚』の作者へ生と死の意味を問う手紙。二は〈私〉が欠落部分を補って「夢」「雨」「息吹」の三部に構成した「寢覚物語」である。